魚の腹の中で

ヨナ書 2:1-11

賈　晶淳

ヨナ書 1 章はヨナが神の指示に逆らい逃亡する話で、2 章はその海に投げ込まれたヨナを呑み込んだ大きな魚の腹の中での話です。今回は 2 章をもとに 1 章の話にも戻りつつお話をしたいと思います。ヨナは神から逃れるつもりでしたが、その道は平たんなものではありませんでした。1 章の終わりにヨナは船員たちに自分を海へ投げ込むように頼みます。厳しい選択だったと思いますが、自殺というより祭儀的な意味が考えられます。いわば贖いの犠牲です。ヨナは大荒波で船乗りや乗客を危険に晒した原因が自分にあることを先ず認め、その後に船上の人々を救うための犠牲として自分を差し出しているのです。自分の過誤を認め、自ら責任を負おうとしていたのです。もしヨナが自分の保身だけを考え、その状況を無視し続けていたら、結局は荒波の中へヨナ自身はもちろん、乗船していた全ての人が船と共に海の底へ沈むことになったでしょう。ヨナはニネベを救うための道を拒否しましたが、船上での出来事は自らの命を捨てて人々を救うことだったのです。このことはヨナ書を理解する重要なポイントです。

2 章の物語は神話のような展開になっています。ヨナは巨大な魚に呑み込まれ命を救われます。あり得ない展開で読者は戸惑うかも知れませんが気になる方は発想を変え、荒波の中に船員が出してくれた舵もない救命ボートに一人で乗せられたと思えば良いと思います。魚の腹の中で独りぼっちになっていることと救命ボートに一人で乗っていることが天涯孤独であるのは同じでしょう。ただ魚の腹の中は真っ暗な闇で、身動きもできなかったと思いますが、祈りに集中することだけはできたように見えます。もしかすると悪臭がし、息苦しいところだったかも知れません。代わりに匂いで息が良く確認でき、救命ボートより揺れはない場所だったかも知れません。

この魚の腹の中で一番変わったのは神が舵を取るようになったことでしょう。それまでヨナは自分で舵を取ろうとしてみましたが、神の介入もあり、今はそれを神に返し、全てを神に委ねようとしているのです。

先ず、4 節から 6 節までにヨナが海に投げ込まれた時の様子が記されていますが、死を覚悟し選んだ道はやはり怖かったのですね。

あなたは、わたしを深い海に投げ込まれた。潮の流れがわたしを巻き込み、波また波がわたしの上を越えて行く。わたしは思った。あなたの御前から追放されたのだと。生きて再び聖なる神殿を見ることがあろうかと。大水がわたしを襲って喉に達する。深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。

2 章の内容はヨナの祈りとして記されています。魚の腹の中は外の世界とすべてが遮断された空間、ヨナは自分が生きているのを確認した安心感より、その先どうなるかという不安感を覚えたかも知れません。三日三晩の昼夜も分からない中、落ち着くようになり、それまでの道程を振り返る余裕もできたでしょう。祈りの中でヨナは神と自分に再び向かい合うようになります。

聖書の預言者は常に孤独な存在でありました。預言者は絶望的な状況の中で選ばれ、神の声を聴く者となります。聖書には神が絶望の中にいる人々の叫び声、うめき声を聴いたという話が何度も出ています。預言者となる人も自らのうめき声をあげていたと思います。神の声と、人々の声と、預言者自身の声が一致するところに啓示を感じていたと思います。私たちも今、大地のうめき声を聴いています。詳しい報告や説明が無くても私たちはその声を肌で感じています。2 節と 3 節です。

ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、言った。苦難の中で、わたしが叫ぶと、主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めると、わたしの声を聞いてくださった。

声を聴くのも重要ですが、より大事なのは声に応えることでしょう。8 節にはヨナの叫びに神が応えたと記されています。

息絶えようとするとき、わたしは主の御名を唱えた。わたしの祈りがあなたに届き、聖なる神殿に達した。

祈りとは神への一方的な願いではなく、神との対話だと思います。そして、祈りの時はヨナが祈っていた魚の腹の中が神殿になったように何処も聖なる時空へと変わります。何にも見えず、何処にも逃げられない魚の腹の中は神と対面する最適な時であり場であったのです。その時、ヨナはそれまでの心の重荷を下ろし、神と自分に向き合うことが出来たのです。しかし、現代人は豊富な知識と経験を持ち、あらゆる面での能力も持ち、多忙に過ごしています。当然のことですがそのような営みの中では、神と他者からの声だけでなく自らの声にも耳を傾けることがなかなか難しいです。

また、人類は文明の発達で生活がとても便利になり、将来に希望もあるという思いで過ごしてきました。しかし、今はその楽観論が消えつつあり、不確実性の中で生きるようになりました。パンデミックの中での今の世界とは、魚の腹の中でヨナが置かれた状況に似ていると思われませんか。この二年以上の間に人類は目に見えないウイルスの恐ろしい感染力の前で無能な存在でした。ただ、ひたすら不安と心配と恐怖と闘うばかりでした。戦争や大地のうめき声もあちこちから聴こえてきます。しかし、それにも応えることができないままにいます。思いますのは地震や台風のような轟音の時より、パンデミックや気温変化のような静音の時の方がさらに深刻です。その意味で、今が祈るべき時だと思っています。うめき声はまだ小さいですが祈れる最後のチャンスかも知れません。今の静かなうめき声が轟音となる時はもう遅いかも知れません。今こそ人類は省みて正しい方向へと舵を切る時だと思います。

憂慮すべき状況はその舵を取る存在が今、見当たらないことです。政治家や知識人、国や国連でも預言者的存在は見えません。国連の機能も大分弱くなり、G7 とかG20 という主要国のグループを作りましたが、影響力は殆どありません。それで今をG0(ゼロ)の時代だという人もいます。ヨーロッパ連合を始め、アメリカや中国などに対する期待も全くできない状況です。分裂だけが拡大されつつあります。

一章の話に少し戻りますが、荒波による不安と絶望の中で船員たちが取った行動がとても印象に残ります。緊急時に対応する姿です。船を軽くするために大切な荷物を海に投げ捨てます。船上の人々を集め祈らせることで人々を落ち着かせ、心を一つにさせます。くじを引きヨナに当たりますが、その選択が正しいものかを確認します。1 章 8 節です。

「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいか。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。

ヨナが大嵐の原因であることを確認した後も船を陸に戻そうと努力します。それができないことが分かり、ヨナを海に投げ込む時は自分たちの行いに対する赦しを求めます。これらの船員たちの行動はとても感動的なもので、世界と私たちが見習うべき姿勢ではないかと思います。

2 章での結論は 10 節の「**救いは、主にこそある**」です。ここで「主」とは救いに向けての一致を表す象徴概念でしょう。今こそ、人類は落ち着いて救いの道を共に祈る時だと思います。今こそ、私たちは舵を切る時だと思います。(2022 年 9 月 4 日証詞より)